

## 【生涯学習としての油絵】

渡邊 始

生涯学習といっても個人で気楽に描いています。子どもの頃より、他の勉強より絵を描くことが好きでした。そんな気がします。勤め始めて仕事に追われ、いつの間にか絵のことはすっかり忘れていましたが、仕事にも慣れて落ち着いてくると、何か趣味をという気になります。

私は仕事の関係で八王子市内の、老人ホームに出入りすることが多く、そこで働く人、お世話になってる人たちに接する機会が多くありました。老人ホームの廊下には水彩画、陶器、盆栽など、ホームの人たちの作品が飾ってあり、よく拝見させていたものです。その人たちの生活ぶりを見てみると趣味を持っている人は、何か生き生きしているように感じました。

このようなことから、私も何か趣味を持つとうそんな衝動にかられ、水彩画を始めました。さて始めてはみたものの、何を描くか、どこから手を付けたらよいか迷いました。取り敢えず描く場所を山に求め、山登りをしてスケッチを始めたのが昨日のように懐かしく思い出されます。その後、描いた



絵を会社の同僚などに見せ、批評を受けたりの日々が続きました。そのうち、油絵に興味を持つようになり、その魅力に取り付かれ油絵を描くようになりました。自分なりに工夫を重ねて、何とかなる位の気持ちで描きました。何年かたちますと、自分の作品を「人に見せたい、発表したい」そんな気持ちになりました。友人に勧められ、絵を展示している食堂やレストランを紹介していただき、作品展を何回か致しました。

私の作品作りは油絵の場合、まず一枚を描きます。一枚目の絵は、おおよそ描き、二枚目を描き、二枚の絵を競わせて仕上げます。時間がかかった方がよいのです。楽しみが増えます。

定年後の現在は、用事のないときは毎日描いています。絵が私の仕事の代わりをしてくれます。絵を描くことにより、友人もでき昨年は何人かでスケッチ旅行をしました。その人たちとのグループ展なども楽しみの一つになっています。



生涯学習通信 生涯学習推進会議

のびのび いきいき 生涯学習

『わたしの生涯学習』



## 【能面と土まこつ】

渡邊 峻

能面というイメージの中で、多くの人が抱いているのは「無表情」ということであろうか。そんな能面に出会ったのは、金融機関を定年退職後フルタイムでない勤めをしながら時間の余裕を活用して七福神や小さな仏像の彫刻をしていた頃であった。

それはある能面展を見に行ったときのこと、会場には女面・翁面・男面・鬼面などが三十点程展示してあった。その中で特に目にとまったのが数点の女面であった。私はこれまで、能とか能面といったものには殆ど無縁であっただけにその時の驚きと感動は今も忘れることができない。それはなんともいえない不思議な魅力と美しい姿をしていたからであった。これが一般的にいわれている「無表情とか不気味ということであろうか、いや自分にはそれが人間にはなし得ない無限の表情と美しさではないのか。」そんなことを自問自答しながらしばらくそこに立ち止まっていた。ふと我に返り元の場所に戻り最初から見直す。柔和な顔をした白髪の翁面、口が耳まで裂けた鬼面、勇壮な男面などそれぞれが表情豊かな美しさを表していた。

人生八十年時代、これからの人生に目標を持ち余暇を無為に過ごすことなく、何にでも挑戦していく前向きな努力が必要である。そうだ能面彫刻に挑戦してみようと一念発起、どこか勉強するところはないか方々探していたところ、甲府の山梨文化学園の中に能面教室があることを知りすぐ申し込み入学した。講師は能面界では有名な久村哲生先生で、月三回毎週木曜日午後六時から八時までの二時間であるが、彫刻に没頭していると、あつという間に終りの時間がきてしまう。能面の場合、能面彫刻といわず「おもてを打つ」というそうだが、一槌一槌精神を込めてノミを打ち込むという意味のようである。私などは、まだまだその域に達していないので、敢えて彫刻と言っている。早いもので月三回始ど休むことなく十年甲府に通い続けた。十年間で、三十面ほど彫つたが未だに満足できる作品はない、それだけ奥の深いことを痛感している。これからは生涯のライフワークとして一〇〇面を目標に挑戦したいと思っている。

一つの木片に精神を込めて、ノミや彫刻刀を打ち込んでいく無我のひととき、徐々に完成されていく面、私にとってこの間の時間が最も魅力のある大切な時間である。